＜今朝の聖書から＞

村上定幸

【なくしたのに】15 章には、“羊”、“なくした銀貨”そして“放蕩息子”の喩の三つが記されています。何回かこの箇所が説教されましたが、今朝は“悔い改め（15:7）”という言葉について、神の声を聞きたいと思います。いずれも、なくなったものが返ってくるという喩です。そして、主人公は、羊や銀貨または、放蕩息子たちではなく、なくした方の神様が中心に描かれています。なくなっていたのに戻ってきたというのは、神様のものだったのに、ということです。

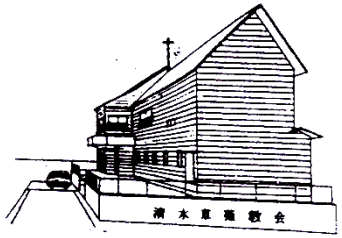
【悔い改めが必要】このように、これらの喩の中心には“悔い改め”があります。私たちも毎週、礼拝において、悔い改めの祈りを行います。“神様との正しい関係がなくなりませんように”と祈るのです。“野原に残して”、あるいは“山に残して（マタイ 18:12）”とある野原や山は教会のことですが、ここが安全であるのは、神様との関係が正しく確認されている所だからです。そこには、“悔い改め”が常にあります。“時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい（マルコ 1:15）”とある通りですし、改革者のルターも、九十五カ条の、その一でこの言葉を指摘しています。こう理解して、もう一度聖書を読みますと、7 節の“悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある”と記されている“必要のない人々”とあるのが誰のことなのか、気になるところです。悔い改めが必要な人というのは、悔い改めるということも知りません。信仰者が、教会生活をおくるようになり、最初に経験することの一つが、悔い改めを忘れないということでしょう。ですから悔い改めを必要としない人々とあるのは、悔い改めを知って行う人々のことです。決して“悔い改めを忘れてよい”とか“悔い改めなくて良い”という意味ではありません。“常に正しくあらせて下さい”と願う人々が教会を形づくり、神様との関係を保っているのです。

【教会の姿】この意味で、“悔い改める必要の充分にある”ことを思い知っているのが教会の姿であり、主の交わりを知らない人々は、悔い改めの必要なことを理解していないのです。反対になりますが、悔い改めの必要がないというのは、悔い改めているということです。この姿は、守られてきましたし、私たちも拒否してはいけないことです。

【放蕩息子達】先に放蕩息子達と書いてありますが、“放蕩息子”というのは一人で、父の財産を食いつぶした、弟の方一人じゃないか、と思われるかもしれませんが、ここに描かれている第三の喩の兄も、自ら“悔い改める必要のない者”と理解していることが分かります（ルカ 15:30）。ですから“達”という言葉で示しました。悔い改めの必要のなさは教会とは無関係なのです。更に、聖書にはないのですが、33 節が隠されていることに気付きます。32 節にある祝宴は、主の祝宴であり、神の招きの座、聖餐の姿です。この招きに兄も招かれ、そこで彼らの悔い改めは実を結び、豊かな生活の基となり、私たちも同じ主の聖餐に連なることになるのです。

週　報

２０１１年　７月　１０日



伝えよう　救い主を
迎えよう　主の民を

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

牧師　　村上　定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前　9：00
礼拝式	毎日曜日	午前 10：30
	（聖餐式　第一日曜日）	
夕礼拝式	毎日曜日	午後　7：00
エステルの会	毎水曜日	午前 10：30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後　7：00

ホームページ　http://kusanagi.church.jp/

〒424-0885
静岡市清水区草薙杉道３丁目２－２６
☎054-345-4070　E-Mail grace@big.jp
振替口座　00890-6-214042